



Salamander
in
the circle

第一章
世界の果ての島

峯村 明

Salamander in the circle

二万年前の世界の果ての島と世界
環に閉じこめられた火の精霊の物語

登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長

ヒューダー・・・・・・・・ 〃 団員

ヤスウ・・・・・・・・ 〃 団員

ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父

マミヤ・・・・・・・・ホシナの娘

オマキ・・・・・・・・ホシナの妻

ゴン・キト・カボ・・・ホシナ族の男たち

目次

世界の果ての島

序章

01.

02.

03.

04.

05.

06.

07.

08.

09.

10.

11.

12.

13.

14.

15.

16.

17.

18.

19.

第一章のあとがき

参考文献

奥付

世界の果ての島

序章

何を、見ている？

立ち込める雲を
降りしきる雨を
逆巻く波を
押し寄せる海を
私自身を

……それから？

私が見るべきものはそれだけ
水を司る者なれば

かつてそなたが慈しんだ生き物らはみな、水の下

ええ……時代がひとつ、終わりました

緑なす山々
国原は大海の中に安らい
奇しき動物の
海底に沈めるもの
再び輝かしい日の光のもとに持ち出され
人類はここに定住する
誰か知る
この詩の結論を (※)

娘は面をあげ、そう低くうたう男にまなざしを向ける

其はいかなる者らか
男の声にはいくぶん、笑いの調子が混じっている

いかなる者らであろうと、生命持つものすべてを、私は慈しむでしょう。なんとなれば
——

水の精霊よ——そなたの名は？

男に目顔で促され、娘は応じる。「ミツハ」、と。

彼らの到来を待つにはここは少々寒い。ともに陽光のもとへ 参らん いざ

「いざ」と言いながら、男はミツハの返答を待っていない。ゆったりとした動作で、ゆるゆると昇っていき、灰色の雲の中に消えてしまう。

ミツハはためらい、荒れる海を見下ろす。ここに、いつか、誰かが来る。男はそう言った。重苦しく塞いでいた心が少しばかり和らぐのを感じる。

いつか また ここに戻ってこよう

それまで 待とう

そう心を決め、鉛色に揺らめく海を一瞥し、打ちつける雨に逆らって上に向かう。厚い灰色の雲を抜けると、そこは目もくらむまぶしさに満ち、白い雲の上を男はゆったりと遊弋していた。

ミツハの姿を認めると、彼は満足げにうなずき、西の方角へと、進路を定めた。

純白の雲に濃く影を落とし、二頭の竜は連れだって、西へと飛び去って行った。

(※ 『日本列島の誕生』・平 朝彦(著)より Heinrich Edmund Naumann 訳・桜井国隆)

01.

「おおい、これを見ろ！ おもしれえものを見つけたぜー！」

大きなだみ声が、先を歩く仲間を呼び止める。だみ声の主はかがみこんだ。青草の間にきらきりと光が躍っている。大人の足でひとまたぎくらいの小さな沢。春の陽光がせせらぐ水面を、水はせせらぎの底に散乱する黒いガラス様の石の輝きを、弾いていた。狩人のような目で狙いを定めた彼は、すばやくせせらぎに手を突っ込んだ。そして自慢げに獲物を宙にかざした。

「こいつは珍しいぜ！」

仲間のひとり、カボが面倒くさそうに振り向く。太陽を背に前進していたので、振り向けば逆光、ゴンが指先につまんでいるモノは、そのシルエットしかわからない。「なんだあ？ ゴンよ、そいつはイモリっていうんだぞ。この沢のあちこちにいる。珍しくもなんともねえよ」

もうひとりの仲間、キトが立ち止まって足元を流れる沢を覗きこんだ。いかにものんきな八の字眉で、目じりがさがっている。「こんな黒曜石のかけらで真っ黒な流れんなかにいるイモリなんて、かんたんに見分けがつかねえぞ。よくも捕まえたもんだ」

「ったく。捕まるほうも捕まるほうだ。珍しいっちゃあ珍しいや、どれ、その、間抜けなイモリを見せてみな」

「なにすんでえ！ おれが捕まえたんだぞ！」

「おいおいー、ふたりともー」

大の男が三人、イモリを巡って騒いでいるところへ、「ちよっとー！！」、と声がか

かった。

「なにをやってんのよ！！ 採石場に着く前に日が暮れちゃうじゃないのよ！！」後頭部でひとつにまとめた黒髪と、強く輝く瞳が印象的な、いかにも、きかん気の少女だ。歳のころは十五、六か。

「お、マミヤ。ちょっと見てみろよ、ゴンのやつがこんなもんを——」「おいこら、返せー」

ゴンからカボへと渡ったイモリは身をよじらせ、勢いよくカボの手を飛び出した。そのまま宙を飛んで——「きゃ！！」マミヤの胸の上にぴたりと着地。男たちの視線は少女のまるいふくらみに集中したのだった。

「へええ」マミヤは目を丸くして自分の胸に張り付いているモノをまじまじと見下ろした。「白いイモリ！ お目目が赤い！ へええ！ かわいい！！」マミヤの指先でちょんとつつかれたが、イモリは足を踏ん張って動かなかった。

「あの一、そいつはおれが見つけたんで……」ゴンは少女の胸と白いイモリを同時に見つめながら、おそろおそろ、そう主張した。マミヤは、彼らのお頭ホシナの溺愛する娘なのだ。

「あらそう？」マミヤはあっさりと言う。それから、「はい」と胸をつき出す。ゴンは思わずたじろいだが、所有権を主張した手前、おそろおそろ手を伸ばして、少女の胸からイモリを回収しようとする。が、イモリは足を踏ん張って、どうやっても動かない。カボとキトとは息をつめてその攻防を見守る。

木々は芽吹き、そこここに野の花が咲き乱れる沢の辺。春爛漫の野山。どこかでヒバ

リがせわしなく鳴いている。そしてゴンはついに諦めた。イモリを諦めたというよりも、お頭の娘の胸に手を伸ばしているところを、カボとキトがどんなふうに言いふらし、どんなふうにお頭の耳に入るか、わかったもんじゃないと思いついたからだ。もしかしたら、死ぬほどぶん殴られるかもしれない。

「無念だ——」つぶやくと、ゴンは膝からくず折れた。

02.

世界が大洪水にのみ込まれたことがあるという話を、知ってる？ いろんな民族がそういう伝説を持っているし、いろんな土地に証拠が残っている。そう、世界はいちど、水にのみ込まれ、滅びたことがある。

じつは、火で滅びたこともある。

ウソだろ、って？

そんな話は聞いたことがない、って？

でも、ほんとうなんだ。あんまり昔のことで、なんの証拠も残っていなければ、誰も覚えていない。

大洪水がなにもかも洗い流して水の底に沈めてしまったように、はるか昔に、火がなにもかも燃やしつくしてしまったことがある。

火を点けたのは、このぼくだ。

*

たくさんの、対になった目が上から見おろしている。地面を這うぼくを。
一対の、年取った目が何か言った。みんながいっせいにそっちを見て——いろんな色を見せる。同意、恭順、ひそかな反発、ひそかな戸惑い、恐れ、哀れみ……。
ひとつも同じ色が無い。けれどもいっせいに同じ動きをする。いっせいにうなずいた。
満場一致でぼくの運命は決まった。
たくさんの目の向こうで、長く尾を引く悲鳴。……おかあさん——？

なにかに閉じ込められた。

上も下もない世界に、意識も感情も身体も、生きたまま。
身動きできず、声も出ない。
そして、堕ちていく。

誰かがささやく。忘れよ、と。すべて忘れよ。おまえにできるのはそれだけだから。

*

ぼくは夢をみる
つめたい真水
つめたいからだ
ゆらゆらとゆれるみずくさのあいだで
ちいさなカニが目をまるくしてこっちをみている
だいじょうぶだよ
きみをたべたりしない
ぼくは夢をみてるだけだ
太陽があたためてくれないと
ぼくは
動けない

目がさめない

鼻の先と

しっぽの先にふれる線が

ぼくの全世界

つめたい水とゆるやかな線が

ぼくをとじこめている

夢の中

*

なにもかも忘れたころ

ぼくは泳いでいた

ゆらゆらと

ゆるい流れのなかで

ときどきぼくは水からあがる

あたたかな石に這い上がって

やさしい陽射しをあびて

からだをあたためる

ああ

気持ちがいい

ずっと

こうしていきたい

流れに身をまかせ
太陽の恵みをときどきもらって
なにも考えずに

まどろんで いたい

ぼくを閉じ込めていたゆるやかな線は

いつのまにか消えていた

*

ぼくを閉じ込めていたゆるやかな線は

いつのまにか消えていた

たぶん、ぼくがなんにもする気がなかったからだ

ただ流れに身をまかせて泳ぎ
ときどきあたたまり
ひらひら飛んでる蝶をちよっとうらやましく思い
平和に暮らしていた

ぼくはひとりだった
ずっと昔から
そしてこれからも

そのはずだった。

ぼくの夢は、ある日突然、男のだみ声で破られた。

03.

「モシモーシ」

マミヤと男三人の一行に声をかけた者がいた。男声だが春の陽光のように朗らかだった。「チョト、オタズネ、シタイ、ノ、デスガー」

イモリを失ってくず折れていたゴンはそろそろと立ち上がった。この妙な訛りでしゃべる人間はよそ者に違いない。彼は威厳を持って「何用だ!？」と声を張った。同行しているお頭の娘の身の安全をも、ゴンは預かっていた。

「この近辺の者ではないな？ 知らぬようだから、言っておくが、畑を歩かんでもらいたい。あんたが今立っている所は、植え付けが終わったばかりの畑だ」

よそ者は二人組。おかしな訛りで声をかけてきた方の男は中肉中背、顔面、目のあたりに透明な水晶の、小さな板のようなものを付けている。視力を調整する機能をもつ物だ。

もうひとは肩幅広く、長身で、長くしっかりとした手足をしていた。前者は焦げ茶色の髪に青い目、後者は髪も目も灰色だ。両者に共通しているのは肌の色……ゴンはまだ見たことがないが、銅、銅の色に近い肌の色をしていた。それは明らかにこの『国』の住民のものではなかった。

(こいつら……何者だ?) ゴンだけでなく、カボもキトも緊張を覚え始めた。

04.

長身の男の方が、水晶製の眼鏡をかけた男になにか耳打ちした。すると眼鏡の男は、はた、とあたりを見回して、「オオ！」と声をあげた。

「コレハ、シツレイ、しました。ここはあなた方の仕事場なのですね」みるみる訛りらしきものが無くなり、言葉が流暢になっていく。

「このあたり一面に植物が植わっている！ たいした仕事です！ みごとな眺めだ！ なんという名の植物ですか？」

警戒していたゴンは釣り込まれるように答えてしまった。「うるとなだ」

「——ウルトラ？」

「うるとなだって！ 訳があつて植えてるんだ。あんたは何者だ、何をしに来た。だいたいここは『国』の直轄地だ、よそ者は簡単に入れんはずだ」

「おお、これは重ね重ね失礼しました。私、こういう者です」

眼鏡の男は左手を軽く握り、胸に当て、見慣れない型の服の袖を軽く引く。そこに、青緑の円形の金属を縦半分、横半分に等分割した銀の飾りのついた、革製の腕輪。

ゴンはそれをしばらくみていたが、やがて言った。「これはおれの手に残るようだ。族長のところへ案内しよう」

よそ者だったふたりは客人となった。

ゴンが先頭に立ち、客人ふたりが続き、その後ろをキト、しんがりにカボとマミヤがいる。マミヤがひそひそとカボに尋ねている。（ねえ、腕輪を見てゴンが目つきを変え

たわ。あの腕輪はなんなの?)

カボは胡散臭げな目つきで、ちょっと首を振っただけだった。

05.

「とつぜんの訪問を、ご容赦ください。私はダーヴェという者です」

水晶眼鏡の男はそう名乗った。沢のほとりで声をかけてきた時はなにやら軽薄な感じがしたが、ホシナ族の族長を前にした彼は、きわめて落ち着いた態度だった。そして、ゴンにしたように、左手を軽く握り、胸に当て、左手首の腕輪を見せた。ホシナはしばらく黙っていたが、ゆっくりと口を開いた。

「ネウトラ評議会が、ホシナ族に、いかなるご用か」

その場にはマミヤのほかにゴン、カボ、キトが同席していた。マミヤはカボとキトに視線を送ったが彼らの顔を見れば『ネウトラ評議会』なるものが何を意味するのかわからない、ということがわかった。

ダーヴェはふっと息をついた。どうやら彼なりに緊張しているらしい。

「は。ではまず……我々の立場ですが……我々は評議会の学術調査団です。何を調査するのかというと、巨人族です」

マミヤたちはいっせいに顔を見合わせた。巨人族の？ 調査？

「この調査は定期的に行われておりまして、五十年前の第二百四十三回目の調査では、この島国には五名の巨人族がいたと、記録されています」

「うむ……それならばワシの記憶にもある。といっても、先々代の記憶だが」

「おお、記憶されているならありがたい。今回は第二百四十四回目なのです。で、五十年経てば地形など変わってしまっていることがあるのでして、地元の名士に、ぜひともご協力をお願いいたしたい次第」

「うむ……」、と、ホシナは腕組みをして話を引き取った。発達した眉上隆起は目に濃い影を落としていて、彼に独特の威厳を与えている。が、頭の中では、（名士……いいひびきだ……）などと、考えているのであった。

「彼ら巨人族は数千年前には絶滅したと考えられていました。が、世界各地にわずかながら生き残りがいることがわかってからは、絶滅危惧種として保護し、かつ、生態を調査し続けている、というわけなのです」

06.

（巨人てえと、ほれ、西の山に住んでるあいつのことか？）

（ねえ、ダイダラボッチのことでしょ？）

（そういや、そろそろ食糧を届けてやらにゃ）

（今さっきの話だと、ダイダラボッチのほかにも、似たようなのがいるみたいだぜ）

（あのコ、さみしがりやだから、それ聞いたらきった喜ぶわ！ ねえ、とうさん、協力してくれってことは、あたしたちの中から誰かついていくんでしょ？ あたしも混ぜて！）

（うむ……そおだなあ）

雰囲気も和み、巨人族調査の話は、あと、具体的に計画を詰めればよさそうだという

感触を得たダーヴェは、膝を緩めて雑談に移った。

「ところでホシナさん、ここへ登って来る途中、なだらかな斜面に、それはたくさんの植物が植えられているのを見ました。ゴンさんは、畑だと。すると、あれは食用なのですか？」

「うむ……あれは、うるとなとって……そうだなあ、どこから話せばいいやら……ホシナ族の祖先が昔、この島国へやってきたころにまでさかのぼるが……」

彼らの天幕にささやかな食事が運び込まれ、ホシナの気持ちもほどけてきた。

「まあ、なんでここまでやってきたかといえば、はるか北の祖先の土地があまりに寒くなってしまったからだ。祖先は土地を諦め、文明を捨て、獣を追い、少しでも暖かい土地を求めて南へと向かった。この島国は、とてもいい所だ、祖先たちはまずそう感じたという。邪気というものをほとんど感じなかった、と。こんな場所は滅多にない、ぜひともここに住みたい、希望に胸膨らませて、上陸しようとした。ところが、『待った』が、かかった。この国の『王の使い』だ。

『王の使い』が言うには、獣を狩る者はなんぴとたりとも、この国に入れるわけにはいかないという。この国の民は植物を主食にしている。獣を狩り、食べることはあいならん、と。

いや、我々はこの美しい島の片隅でささやかに生きていきたいだけだ、獣を狩るといっても、それは我らの生きる糧であって、原住の人々に奨めはしないから。

いや、だめだ

祖先と『王の使い』の言い合いは続く。祖先も必死だった。故郷の地はすでに氷に閉ざされ、歩いてきた南への道の周囲も似た有様だったからだ。そうこうするうち、雪の降らない猛烈な寒波がやってきて、続いて、猛烈な暑さがやってきた。土地は痛めつけられ、水は足りず、人々が主食にしている植物も芽を出さず、実を結ばない。王に従ってきた多くの人々が犠牲になり、ついに王は肉食を許可したのだ」

07.

「しかし、肉食によって肉体の飢えはしのがれたが、今度は心が荒み始めた。思いのほか美味だとわかった肉を奪い合い始めた。人々は苛立ち、争いごとが増えていった。

ある日、祖先のもとへ、王の勅がもたらされた。獣を捕獲すること、また、原住民の人々にその方法を教えることを許可する、と。ただし、獣の重さと、少なくとも同じ重さの『うると菜』を同時に供給せよ、と。

うると菜とは、神仙のごとき王の一族が主食とする植物で、うると菜と肉とを同時に食することで肉の好ましからぬ影響を減らすことができるのだ。

そして祖先は『王の使い』によって、この地に導かれた。ここには獣を狩る道具をつくるのに必要な素材、すなわち鋭い刃物となる黒曜石の鉱脈があり、冷涼な空気と、冷たい地下水とがあった。原住民の人々が主食としているコメを育てるには冷涼にすぎる。しかし、うると菜の生育には向いているというのだ。

とはいえ、我らは石を加工するのはお手の物だが、植物を育てるとなるとまるっきり、わけが分からん。頭を抱えていると、王が人を送ってきた。食用植物を育てる専門家、技術者の集団だ。かつて、コメを大量に収穫できるように改良したのも彼らだった。

実は原種のうると菜を食ってみるとびっくりするが、ものすごく、苦いのだ。さすが神仙の主食というか、人の口には合わん。それを人に食わせるために、土壤に手を加え、品種を改良し、失敗を重ね、たいへんな骨を折った。王のもとから送られてきた彼らの失敗、意気消沈、懊悩を祖先は目の当たりにした。彼らの苦しみの念は人々を飢えさせることに対してのものだった。

祖先らを監視する役割もあったようだが、王は自身の施政を譲ってでも人々の食糧問

題を解決したいのだと、祖先らはそれをひしひしと感じたと、記憶にある——」

ホシナは目を閉じ、眼前によみがえる祖先の記憶をたどっている。

「当時——大小の礫がごろごろしていた広大なこの地の開墾を助けたのが——なんと、ダーヴェどの、貴殿が調べに来たという、そのダイドラボッチなのだ」

初めて聞く話だわ、とマミヤは思った。父ホシナは祖先の血が濃い、マミヤの母オマキは生粋の原住民の女性、そのためかどうか、マミヤには父のように祖先の記憶を自分の記憶のように思い出すということができない。割と容易にその能力を駆使できる者は、やはり祖先の血を濃く受け継いでいる。混血によって力を失っていくのだらうとホシナは言う。

失うことに、祖先は頓着しなかったという。すでに多くを失ってきた。しかし、その一方で新しいものを得た。それでよしとしよう、と。

08.

「おはようございます。ダーヴェさま」

「やあ、おはようございます。マミヤさん。早起きですねえ」

「あら、ダーヴェさまこそ」

「いやあ、はっはっは。えーと、その、『さま』はやめてくれませんか。ダーヴェと呼んでください。私もマミヤ、と呼ばせてもらいますから」

「え、でも、とーさ、いえ、父が評議会からいらした人には失礼のないようにって」

いっしゅん、ダーヴェの朗らかな面になにかの感情がかすめたようにみえたのは、気のせいかな。

「あのね、評議会の者だからといって、私は偉くもなんともないですよ。ただ仕事をしているだけです。……おや、それは？ イモリ？」

「はい、昨日、沢で見つけて。あたしにくっついて離れないの」

「ふうむ、白いイモリとは珍しい。ほんとだ、あなたの手にしがみついて離れようとしませんねえ」

「ゆうべもずっと、あたしの枕元にいたわ。そのうちどこかへ行っちゃうかも、って思ったけど、あたしが目を覚ましたら、いそいそと胸にはいあがってきてね。ふふっ。でもイモリって水がないと干からびちゃうでしょ。水の中に戻してあげたいんだけど……」

ダーヴェは指先を向けてみたが、イモリは興味を示さなかった。

「おやおや。よほどあなたが気に入ったみたいですよ。いっそ、飼ってあげたらどうです？」

ダーヴェは手が早かった。どこからともなく適当な丸太を探してきて、そこらに落ちている手ごろな大きさの黒曜石を適当に割り、丸太を彫り込んでいく。

マミヤは目を丸くしてその様子を見守る。彼女の頭のとっぺんには白いイモリが乗っかり、マミヤといっしょになってダーヴェの手仕事を覗きこんでいる。採石場に泊まり込んでいる人々が三々五々起きてきて、「おれよりうまいぞ」と、客人の仕事ぶりに感心し、マミヤの白いイモリを面白がった。

そのうちにマミヤはダーヴェの連れの姿を見つけた。

09.

「おはようございます。ヒューダーさま」

「——ああ」

ダーヴェはやたらと愛想がよかったが、こちらの男はめっぽう不愛想だった。ダーヴェはホシナと近い年代で、こちらの男はマミヤよりいくつか年が上、おそらくゴンと同じくらいだ。しかし、不愛想で年が上の男だからといってマミヤは気にしない。

「あの一、ヒューダーさまは、ダーヴェさまのことをなんと呼んでいらっしゃいますか？」

「——なぜそんなことを聞く」

「ご本人が『さま』はやめてくれとおっしゃるの。あたしもそうしたいけど、でも、呼び捨てにするのもおかしいでしょ」

「——オレは、『先生』と呼んでいる」

「せんせい？」

「師だ。いくつもの意味で、彼はオレの師だ」

ヒューダーは短くそう言い、立ち去ろうと——したが、足が止まった。なにかぺったりとしたものを肩に感じたのだ。マミヤが「あっ！」と慌てる。白いイモリがヒューダーの左肩に……昨日は袖のある服を着こんでいたが、今朝は短い袖を肩まで折り返していた……貼りついている。

「ご、ごめんなさい!!! こら! こっち来なさい!!!」

昨日、沢の辺で、マミヤの胸に乗ったイモリをゴンがへどもどしながら摘まもうとした図の再現である。美しく引き締まった筋肉と赤銅色の肌の色はマミヤの見たことのないもので、マミヤはどぎまぎしてイモリを指先で摘んだ。じっとしてなさいよ!

と睨みつけながら。

イモリはちょっと名残惜しそうに、ヒューダーの肩を離れ、マミヤをほっとさせた。

(ふん……!) その様子を遠くから見るともなく見ていたのは、ゴンである。(あの体格、あの体つきで、文官だ、と? 嘘こくんじゃねえ! おれの誇り高いご先祖の記憶じゃ、ああいう体つきは鍛えに鍛えた戦士のものだ。『ヒューダー』で名だって、『剣を持つ者』で意味だ。)

昨夜、文官だ、と自己紹介したヒューダーに、ゴンはそう言って絡んだのだった。すると、「単に名前だ。気にしないでもらいたい」とかわされ、ダーヴェは、「ヒューダーは世界中の民族史と言語に精通しています。今回は通訳として同行してもらったのですよ」、という。

そう言われてみれば、ヒューダーからダーヴェになにやら耳打ちしている場面を見たま見かける。通訳しているというのは本当なのかもしれない。本当かもしれないだけに、ゴンの胸中に波が立つ。マミヤといっしょにいるところを目にすればなお、いっそう。

「——てっっ !!」

「あ。手、切りやがった。大丈夫か?」

「石に嫌われたんだろ。雑念がぶんぶんしてるからな」

10.

「黒曜石で手を切ったんだって? お前はしばらく石に触るな」と、お頭からのお達しを予想していたゴンだったが、「別の仕事があるぞ、ダイダラボッチに食糧を届けて

やってくれ。荷物持ち兼マミヤのお守（も）りだ」との仰せに目をむいた。お頭の名代としてキトが同行する。ということはゴンはほんとにただの荷物持ちなのだ。

「なにか文句があるのか？」

「いや……その……」

「初心者じゃあるまいし、石で手を切るなんて、心身を律しきれていない証拠だ、ほかの者に示しがつかん。少し頭を冷やしてこい」

ダイドラボッチが棲む山まで、山を二つ超えて谷に下る。大人の足で一日ほどの距離である。うると菜が栽培されている斜面とはほぼ反対の方角になる。

「うると菜の畑も見事でしたが、今朝はとても感動しました……」

「そこいら中に散らばっている黒曜石のかけらが、朝日にきらきら光って……あたしも、いつ見てもドキドキします」

「まるで、空から星が降ったあとのようでしたね。そう、私が感動したのはあの美しい光景と同じものが、私の、私の祖先の記憶にもあったからなのです」

「ダーヴェ先生の？ ご先祖？ ご先祖も黒曜石を！？」

「ええ、とても古い、古い記憶です。祖先たちはここからずっと西の、大陸の奥地で黒曜石の大きな鉱脈を見つけ、そこで石を取り出し、割って石器を作りました。ひじょうに質の良い石が採れ、祖先たちは器用だったので、素晴らしい石器が生まれました。石器は世界中から求められ、祖先たちは富を手に入れた。青い空の下、陽光に黒い石が燦然と光り輝く光景は祖先たちの心に深く刻まれています」

「世界中から求められたとおっしゃいましたね、そんなに獣を獲ったの？ あの、あたしたちのところではたくさん獲ってはいけない決まりになってるんです」

マミヤの言葉に、ダーヴェは黙ったまま、しばらく歩いた。

「獣を獲ったのではありません。人と人が争った。つまり戦争に使われたのです」

聞きなれない言葉だったが、その禍々しい響きに、マミヤの頬がそそげだった。

「よく……わかりません、戦争って、なんですか？」

「大陸というところはどこまで入っても土がある。山があり谷があり、川があつて湖がある。でも、棲むのに適している場所のごくわずか。少しでも暮らしやすい土地が欲しかったり、よその部族と考え方が違うからといたり、中には、単に殺し合いがしたかったり。人はさまざまな理由で戦争を始めるのです。攻めたり攻められたりの繰り返しの繰り返しなのです。あなたが知らないのも当然。現に今、世界のあちこちで戦争が行われているのに、ここだけはとても平和です。王は外から人が入ってくるのを非常に注意深く見えています。驚いたのは……あなたがたの王は人々を自分の家族と思っているということです。家族を守り育てることをご自分の使命とされている。このような王は今の世界のどこにもいません」

「……………」

「じっさい、私たち、ここまでのどり着くのにけっこう大変だったんですよ。さんざん誓約の儀式やら、書類に署名やら。これで違約でも発覚した日にはどんなことになるやら。ねえ、ヒューダー」

ダーヴェとマミヤの後ろを歩いていたヒューダーは言った。「ただではすまさない。そういう圧迫感があった」

「ははは。あなたもそう感じましたか！」

11.

ダーヴェは快活に笑うがヒューダーは笑わない。肌の色からして同じ族なのだろうに、彼らの性格はまるで違うようだ。なにか無難な話題はないかしらと考えたマミヤは斜め後ろを振り返りながら尋ねる。

「ヒューダーさまは、ダーヴェ先生と同じ故郷の出なのですか？」、と。稜線とはいえ、足元はわりとなだらかな尾根で、よそ見しても踏み外す心配はない。ヒューダーは遠くの山に目をやっているところだった。彼はちらりとマミヤを見、また山に目を戻

し、「いや」と応える。言葉が短いから話しづらいのよね、とマミヤが思っていると、ヒューダーは続けた。

「ダーヴェの祖先の故郷は北緯40度、東経45度のあたり（※）にあった。ここからほぼ真西、大陸の奥地だ。オレの故郷は——言ってみれば、地球の反対側にある」

「は——」口数が増えたところで、これではなんのことやらさっぱりわからない。ぽかんとしたマミヤにヒューダーはふっと笑った。

「そうだな、ダーヴェとオレは同じ人種ではある。が、はるか昔にそれぞれ別の土地を目指した。そして長い歳月を経て、ここで再び出会ったというわけだ」

口数も表情も乏しいヒューダーだが、わずかな笑みにマミヤはどきっとした。

「ほら、マミヤ、足元に石がありますよ。うわの空で山道を歩くのは危ないですよ」

「は、はい！ あの、ヒューダーさま、今のお話、あとでゆっくり聞かせてください。あたしにはむずかしくて」

「あとで、時間があつたらな」

しんがりでイノシシ二頭分の肉をひとりで担いでいるゴンは……半分持とうとヒューダーが差し出した手を無視した……額のあたりから不機嫌な気をめらめらと立ち昇らせているのだった。

（※）この時代に経緯度や三角関数の知識や概念があつたかどうかは不明。が、これだと現在の地名を使わずに、この辺り、と説明できる。ご笑覧ください。

12.

——おかしい。キトがつぶやいた。ふだんはのんきな人の字に開いている眉のあいだが今は狭くなり、縦にしわが寄っている。

マミヤも立ち止まってしまった。ダイダラボッチが棲んでいるという洞窟にほど近い岩山を下っているところだった。

「ほんとだ。へんね。いつもなら大喜びで飛び出してくるのに。知らない人が来たから怖がって逃げちゃったのかな」

ダイダラボッチの気配がしない。

「あんなバカでかい図体で、どこへ逃げるってんだ？」

「そりゃそうだけど。でも——どうしたの？ まさか——死んじゃったんじゃない？」

「この前会ったのはいつですか、マミヤ」

「雪が深い冬の間は山に入れないの、だから、雪が溶けてからです。うると菜の種を蒔いて、ふもとから鉦山へ上った後だから……そんな前のことじゃないわ」

「とにかく、棲みかの洞窟へ行ってみましょう。もしかしたら病気で動けないのかも」

棲みかは空っぽだった。

「この前運び込んだ干し肉と干し野菜がまだ残ってるわ——」

寝床の干し草も乱れがない。病気で苦しんだ様子もない。マミヤとキトはあたふたとあちこちを探し回った。ダイダラボッチは怪物のような巨体ではあるが、おだやかな性格の、気のいい怪物だった。大木が倒れれば取り除き、土砂崩れで川がせき止められれば、土砂を取り除き、崖から落ちそうな岩があれば押し戻してくれた。彼のおかげでこのあたりの山にはクマやオオカミといった肉食の獣が寄り付かなかった。その巨体からして小食ではなかったが、ホシナ族が提供する肉や野菜に不平をいうことはなかった。彼はまるで、山の精霊、守り神だった。

大きな洞窟の前で、ダーヴェは目を半眼にして、黙然と佇んでいる。調査対象が行方不明とは、困ったことになった、とでも考えているのか。

一方、ヒューダーは何か手がかりはないかと洞窟の中を調べている。巨人のねぐらだけあって、ただっ広い。

と、ダーヴェが低く、鋭く、呼んだ。（ヒューダー！！）

はっと振り返ったヒューダーは叫び声を聞いた。マミヤだ！ 彼はとって返し、洞窟を飛び出した。そして、ダーヴェが顔を向けている方向を見た。

マミヤが両手をこぶしにして口に当て、立ちすくんでいる。彼女から数十歩と離れていない場所に――

「キツネ！？」叫んだのはキトだ。数匹のキツネが頭を低くしてマミヤの前方にいる！

ヒューダーがものも言わずに飛び出すのと、一匹のキツネがマミヤにとびかかるのが同時だった。

13.

ホシナ族はキツネやタヌキを狩らない。いや、狩ってはならない。『王の使い』によると、善くも悪くも、モノが憑きやすい動物だからだという。狩られる心配がないかれらはヒトを恐れることも、敵視することもなかった。これまでは。

そのキツネから、猛烈な害意がやってくる。私を殺そうとしている。マミヤは衝撃のあまり、目を閉じることもできずにいた。キツネの唾液にまみれた牙が瞬く間に眼前に迫る。次の瞬間。キツネは何かにはね飛ばされた。石だらけの地面に転がって、もがくが四肢に力が入らないようだ。幾度も立とうとして、ついにその場に這いつくばってしまった。

跳躍したキツネを横から飛び込んできたヒューダーがぶん殴ったのだ。彼は地面に平べったくなっている獣を指さし、その仲間らに向かって声を張った。「手加減してあ。死にはしない。仲間を連れてここから去れ」

出鼻をくじかれたキツネたちはいじけた横目でヒューダーの様子を伺いながら、立えない仲間の首を啜えて、こそこそといった態で逃げていく。キツネの襲撃といい、それを退けたヒューダーの手際といい、キトはただ呆然と眺め、こめかみを流れる冷や汗を手でぬぐう。そして――

キツネの退場と入れ替わるように、一行が降りてきた岩山の上に複数の人影が現れた。汗を拭う手が凍りついたキツだったが、口から「ありゃ」と声が漏れた。

わらわらと岩山を降りてきたのはホシナの妻、マミヤの母親、オマキが引き連れた狩人の一団だった。

「かあさんなの！？ どうしたのよ、いったい！？」

まあまあ、と余裕の身振りで娘を押しとどめながらオマキは、感に堪えたように首を左右に振った。

「驚いたね！ キツネがヒトを襲おうとするなんて、前代未聞だよ！ それにしても、あなたは大した戦士だ！ 娘に何事もなくてよかった！ 札をいわせておくれ」

オマキは黒い目を煌めかせてそう言った。マミヤの威勢のよさは母親譲りらしい。ヒューダーは困った顔をした。「いや、オレはそういう者ではない。今のはただの護身術で……」

ふふっと目を細めたオマキはマミヤに向き直り、「はいよ」と何かを手渡した。

「え——なんで——？」

「そいつがねえ、とうさんのスネにかじりついたり、あたしの顔にまで昇ったり、うろちよろちよろ、もう、邪魔でしようがなかったんだ。そのうち、誰かが、マミヤになにかあったんじゃないかって言い出して。そしたら、こいつ、そうだそうだって、うなづくじゃないか」

「え——」

「それで、若い衆といっしょに、あんたたちを追いかけてきたというわけ。ダーヴェさんが作ってくださった水槽ももってきたよ、はい」

「ああ——そうだったの——みんな——ありがと——かあさんも——おまえも——」

白いイモリは幸せそうにマミヤの胸に収まっていた。

「あ、そうだ、かあさん、あのね——」

そうだ、ことの発端はダイダラボッチだった。ふと辺りに視線を移したキトの目に、信じられない光景が映った。キトは己の目が信じられず、口をあけるが、声が出ない。「あ」、と気が付いたのはマミヤだった。

マミヤとヒューダー、オマキたちからかなり離れたところにダーヴェェがいた。そのダーヴェェの首筋に黒い小刀が光を弾いている。小刀を手をしているのは——ゴンだ。

14.

それはヒューダーの背後で起こっていた。ゴンがダーヴェェを盾にしている構図で、死角から奇襲をかけるという手はもはや使えない。呆然とキトがつぶやく。「ゴン、おまえ、なにをやってんだ……？」

オマキを始め、狩人たちも驚きのあまり誰も声をあげることができない。キツネがヒトを襲う以上の衝撃だった。

「ゴン——おまえ、神聖な黒曜石でなにをしているの——」オマキは目を見開いてそうつぶやくのがやっとだ。ホシナ族にとって黒曜石とはそういうものだった。民の飢えを救うため、野山の動物の生命をもらう。それ以外には決して使わない。王の信のもとに扱うことを許されたのだ。

オマキは身震いした。今、彼女が目にしてしているゴンの行為は、代々のホシナ族と、この国の王に対する裏切りそのものではないか！

「こっちへ、来い」ゴンがしゃがれた声で言った。

「こっちへ。来い、マミヤ。さっさと来い。さもなければ、この男を、殺す」

ヒューダーはオマキに聞こえるくらいの低い声で言った。ゴンの目はすわり、いやな光を帯びている。

(落ち着いて。ゴンは何かにとりつかれている。先刻のキツネといい、この岩場には何か目に見えない、得体のしれないモノがいる)

(……でも、なんでマミヤなの！……)

ヒューダーはなんとなく感じていた。ゴンのマミヤを見る目、ヒューダーを見る目。マミヤへの執着、そしてヒューダーの存在がゴンの自尊心を著しく……刺激するらしい。それら負方向の感情が『得体の知れないモノ』を引きつけてしまったのだ。

「何度も言わせるんじゃねえぞ」

マミヤはごくりと喉を鳴らし、ヒューダーの横をゆっくりと通り過ぎる。オマキにも、ヒューダーにも止めるすべがない。

「ゴンよ——」かすれた声をあげたのはキトだった。「おれはホシナの族長の名代の立場を預かっている。おれのいうことを族長の言葉と思って聞け。黒曜石の小刀をおろせ。それから。その人から離れよ！ その人はホシナの客人だぞ！」

のんきでおだやかな人の字眉毛のキトは決死の思いで声をふり絞った。だがゴンの返答は「どっちもできん」だった。「マミヤ、さっさとこっちへ来い」彼の右手はけいれんするように震えている。

「い、行くわ。だから、キトのいうことを聞いて！」

「俺に命令するんじゃねえ」

「命令だなんて——」

ホシナの客人を神聖な黒曜石で脅し、族長の娘を得ようという。いくつもの禁を破らんとするゴンを待っているのは——破滅だけではないか。ヒトの破滅を望むモノ。それは——

はっ、とダーヴェの脳裏に光が閃いた。

マミヤはゴンが小刀を握る、右手の側から近づいていた。ゴンの右側から近づいて何をしようという思惑があったわけではない。ただ、（もしも——ゴンが傷つけようとするならあたしじゃなくて、ダーヴェ先生の方。だから、あたしは大丈夫——）考えていたのはそれだけだ。

ゴンから数歩離れたところでマミヤは立ち止まり、眉をひそめていった。「右の手から血が出てるわ、ゴン。昨日切ったところが開いちゃったのね。手当をしなくちゃ」

いくつものことが同時に起こった。まずゴンが悲鳴をあげた。彼の顔面にイモリが貼りついている。それを振り払おうとゴンの左手が緩み、すかさずダーヴェが左足で背後のゴンの足を蹴り上げる。マミヤがゴンの右手に飛びかかる。

（ちっ）、と舌打ち、それから（もう少しだったのに。馬鹿が）残念でもなさそうな、笑いを含んだ想念。（とりあえず、女の子だけでいい）

だれかが叫び声をあげながら指さす方をみれば、ダーヴェとゴン、マミヤの三人がもみ合うその上方に、黒い雲が渦を巻いている。渦の下の端が生き物のように細長く伸びてマミヤの胴体に巻きついた。「た、たすけて！！」マミヤは脚をばたつかせて叫び、ゴンはその脚を両手でつかもうとしている。

ヒューダーが間髪入れずに飛び出し、マミヤをつかもうと宙空にまで引き上げられたゴンを引きずりおろす。そして、「ダーヴェ！！」どなった。

「追ってくれ！！ あなたなら追えるだろう！！」

「しかし！！」

「行ってくれ！！ こっちはオレがなんとかする！！」

マミヤの体はすでに半分も渦巻の中に入ってしまった。ダーヴェはうなずき、両

手の指先をおかしな具合に絡み合わせた。続いて何かつぶやくと、彼の体も黒い渦の中に吸い込まれていった。

15.

マミヤとダーヴェともみ合った際に、ゴンは小刀を握っていた右手の指をすべて失った。黒曜石を割り、削り、見事な刃物に仕上げた自慢の指がすべて無くなってしまった。

ひそかに懸想した少女が目の前で消えた。

ホシナ族の客人を背後から羽交い絞めにし、その首筋に突きつけた小刀は、この国の王の許しなしに持つことのできない黒曜石でできていた。

どれひとつとっても、取り返しのつかない喪失であり、疑いようのない『罪』だった。悔やんでも悔やみきれない。しかし……なんだかことの順番が違うぞ、漠然とゴンはそう考えていた。ひとつひとつ、場面が前へと戻っていく。

赤銅色の肌の、すかした男に、マミヤが屈託のない笑みを向けている。ゴンの目の前で。

ああ、とぼんやりと思う。このころから俺は俺でなくなってしまったような気がする……

場面はますます前へと戻っていく。キトを先頭に採石場で族長らに見送られた朝、その前夜、その前日へ、さらにその前日へ。場面が戻る速さがしだいに増していく。少年時代へ、幼年期へ。

もしかしたらこれは、死の間際に逆向きにみるという、一生涯の走馬燈とかいうやつか

そうか

俺は死罪になったのだ

そうか
そうだろうとも
それだけのことを俺はしてしまった
父母よ
馬鹿な俺を許してくれ
いや、忘れてくれ
お頭、罪を犯したのは俺だ
どうか父母を責めないでくれ
ああ
そんなことを乞う筋合いが、俺にはなかった
お頭の娘を、俺は――
俺の指が揃っていたなら――

そうか
俺にはもはや、黒曜石を持つ資格がなかった
俺のせいで、ホシナ族からその資格が取り上げられるやもしれん
ああ
みんな俺を許してくれ
父母よ、お頭よ
マミヤ、おまえも――
さらばだ。みんな。俺は罪を償おう――

白い、光。

「それがそなたの、まことの心か」

声がした。男のものとも、女のものともいえない、ふしぎな響きの声。優しく、深い響き。

「目を開けよ」

命じられるまま、彼は目を開ける。目の前に男の顔。憔悴し、頬はこけ、まなざしに力はない。それは鏡に映った己自身だとは、彼は気が付かない。

「それがそなたの、まことの心であれば、そなたにはまだできることがある。ここから南、海のなかに、黒曜石の鉱脈が沈んでいる。行って、そなたの目で、探し出すがい」

16.

なだらかな山裾の、うっそうとした深い森は樹齢数千年を超える木々から成る。まさに太古の森の中にその建造物はこつぜんと現れる。地面には濃淡の灰色の石がモザイクのように敷き詰められ、数段の石の階段が、広大な石のテラスへと、訪れた者をいざなう。建物はすべてわずかな凹凸も持つ淡灰色の石できており、太陽光を柔らかく反射している。自然のなかで突出することなく、むしろ、太古の森の緑と溶け合い、森の一部のようにさえ見える。ここにこの国の王が住まい、民衆を治める中央政庁をも有している。

ヒューダーは巨人族調査のために入国を申し入れた時と同じように、調査の最中に起きたトラブルを報告するために、再びここを訪れた。少なくとも、経過報告が出国の条件となっていた。

ホシナともうひとり、トーノという名の初老の女性が同行している。オマキの母親であり、ホシナの黒曜石の鉱山とうると菜の畑を共同で営む原住の人々の、長老的存在だった。

ゴンのしでかしたことからすれば、ホシナ族に与えられた黒曜石とうると菜の特別認可が取り消される恐れがあった。それどころか現在の居住地にいられなくなる恐れもある。ホシナとトーノは王宮の見事な建築も装飾もまるで目に入らず、黙々と時が来るのを待っている。

やがて、仕切りのすべらかな織物が持ち上げられ、立派な身なりの役人が現れ、ふたりは別室に案内された。そこで知った顔を見るまでは、生きた心地がしなかったものだった。

「ヒューダーどの！！」ホシナは抱きつかんばかりに駆け寄った。ヒューダーはホシナの手を取り、もう片方の手であとから来るトーノの肘を支え、目顔でうなずいた。その様子を役人はじっと見ていた。

「さて」役人は軽く咳払いし、口を切った。巻物を手にしている。ホシナもトーノもこういった場は初めてで、どうふるまってよいかわからず、膝を折って床にひれ伏そうとした。ヒューダーが目顔で、そのままで、とサインを送ってきたので、彼と同じように、立ったまま姿勢を正した。

「さて、此度の案件、ネウトラ評議会調査団員より報告を受け、当方にて独自に調査を行った結果、報告に相違ないと判断、ホシナ族には誤りのないことが確かめられた。よって、特に、賞罰はない。以上」

ホシナは、「は？」と面をあげた。「そ、それだけ？」

役人は巻物を元にもどしながら返した。「それだけ、とは？ なにか足りぬのか？」

「えー、その、うちの若いモンがいろいろとやっちゃあならんことをやらかしてるんですが。罰がないってどういうことですか？ そうだ、そもそものゴンのやつはどうなったんです？」

「ゴン。うむ、彼の記憶を辿った結果、その『やっちゃあならんこと』の数々は、きわめて悪質な憑依によるものとわかった。彼は己のしたことを悔い、己を責め、己が傷つけたものすべてに許しを乞うた。しかし、なんらかの罰は必要である。彼はホシナ族に帰ることはできぬ。彼には……」役人は窓の向こうを指さした。「この方角、海底にある黒曜石の鉱脈の開発に赴いてもらった」

「そ——」ホシナはへたへたとその場に座り込んでしまった。

「なんということじゃ！ 婿殿や！ よかったというべきぞ！ わしは極刑を覚悟していたわ！」

「義母どの！ ほ、ほんに！」

「ホシナ族におとがめはないということだ。よかったなふたりとも」

「ヒューダーどの！！」

「しかし、よかったとばかり言ってもいられん。まだマミヤが」

ホシナとトーノは絶句した。まだその問題があった！ おのれ、ゴンのやつ、とんでもないことしやがって！ 今度会ったら死ぬほどぶん殴ってやる！ かたく決心するホシナである。

17.

「おい～、待ちくたびれたぜ～」

「人質役、ご苦労だった、ヤスウ」

「ったくも～。調査するだけだっつってんのに、一人はここに残れ、なんてよ、ネウトラ評議会を何だと思ってやがんだ！ 世界広しといえど、んなこと言い出すのはこの国くらいだぜ！！」

「邪（よこしま）なものを中に入れたくないのだ」

「ふん」

仲間のヤスウと合流したヒューダーは口数少なく大股に廊下を歩いていく。「とにかく、出国する。話はそれからだ」

「賛成賛成」

この国は極東の孤島で自然も厳しいせいか、他国との交流はあまり行われていない。が、ネウトラ評議会には加盟している。評議会は独立国並みの領土を持っており、そこには研究機関、教育機関もある。ヤスウの祖父母の代に国から派遣され、両親は『ネウトラ評議会』で生まれ育ち、ヤスウ自身はさらにその子の世代だ。この国の者であってそうではないともいえる存在で、仲間の調査官の行動に『重石』をつけるには、まあ、ちょうどよかったのだった。

周囲を巨石で囲まれた空間。下方向に長く緩い傾斜があって、ヤスウの操縦する船は傾斜を滑るように助走する。十分スピードが乗ったところで、船の下方からエネルギーが噴出され、船は浮き上がり、外の空間へ躍り出すべく、後方への噴射に角度が変わっていく。

滑走から離陸可能な速度に達するポイントというものがある。このポイントを過ぎると航空機は離陸を中止することはできない。跳ぶだけだ。ヤスウはこの瞬間がたまらなく好きだった。体中の血が逆流するような快感だ。機には垂直離着陸の機能も備わって

いるが、ヤスウはこの快感を味わいたいがために、滑走の施設があれば必ず使わせてもらっていた。この施設はけっこう長い距離を必要とするので、大抵は天然の地形を利用するが、この国のは半分は人工物という珍しいものだった。自然物と人工物との境がまるでわからない、一体化しているという見事な造りに、ヤスウは他愛もなく悦に入る。「さすが、俺の祖国！」

操縦桿を軽く握り直し、唇を舐め、「行くぜ」と、宣言する。ヒューダーは「ああ」と短く返す。

外は真昼、まぶしい光は陽光と海原の反射。軽い合金製の機体はなんの衝撃もなく、次の瞬間には空と海の間にあった。ヒューダーは得も言われぬ解放感を覚えた。

18.

「結局——」

「そういうことだ」

巨人族がひとりも見つからないのだ。ダイドラボッチだけではない。

巨人族は山奥の秘教、大陸の利用価値のない端、絶海の孤島などで細々と生き残っていた。多くは人と接することなく生息していたが、唯一の例外がダイドラボッチだった。彼は地元の人々に労働を提供し、山の守り神のように扱われ、時には食糧の援助を受けてさえいた。守り守られる関係にあったわけだ。それゆえ、ダーヴェ調査団は厄介ともいえる入国審査を経て、地元民に接触し、彼の居住地へ赴いたのである。

「居住地へ入ってわかったことがある。何者かが侵入した。それもえらく邪悪なやつだ。そいつの余波を受けただけで、ふだんは害のない人間や獣が突然、凶暴になってし

まった」

「……………」

「上級賢者ダーヴェがまるっきり感知できなかった。隠れるのが上手く、することがえげつなく、めっぼう逃げ足の速いやつだ」

「ふうん……邪悪で隠れるのが上手くてえげつなくて逃げ足の速いそいつが、巨人族とどういう関係があるんだい？ 若い娘っこがさらわれたってのはわからねえでもねえが」

「まったく、な。おそらく、マミヤが……その若い娘だ……さらわれたのと同じ方法で、巨人族もさらわれたのだ。跡形も残らないという点で違いがない。ヤスウ、ダーヴェの追跡はできているな？」

「おう。異空間に入る瞬間、ダーヴェ先生が俺に信号を送ってきた。ちゃんとつかまえてある。場所はわからねえが先生は生きてるぜ」

「さすがだ。魔法使い」

「へへん。ところでよお、そのうろちょろしてるの、なんとかならねえのか？ 目ざわりでしょうがねえよ」

「ああ」

ヒューダーはそれを目で追っていた。計器盤の上を、するする、するすると動き回る白いイモリを。いったいいつの間に、どうやって、と呆れたものだ。イモリはヒューダーの服に貼りついてホシナ族の居住地から王の宮殿までついてきてしまったのである。ホシナに連れ帰ってもらおうとしたが、イモリは頑としてヒューダーから離れなかった。

「こら～、そんなとこに乗るんじゃねえ——」

直径が30センチほどの球形、地球儀が、ヒューダーとヤスウの座席の間に浮いて、船の現在位置が赤い点で示されている。赤い点は今、洋上にある。

ヒューダーの目と、イモリの目とが、合った。イモリはたしかにヒューダーの注意を引いていた——！

「ヤスウ！！」

「な、なんだい、いきなり！」

「そこだ！！」

「——へ？」

「マミヤとダーヴェだ！ ふたりはそこにいる！」

19.

「……はあ？」

ヒューダーの指さす先に、イモリの右前足があった。それが地球儀の、ある部分に乗っている。

「あのなあ……」ヤスウは呆れてやっとの思いで言った。「なに考えてんの、あんた」

ヒューダーの目と、イモリの目とが、同時にヤスウを見た。どちらも真剣な、澄んだまなざしだった。

「本気かよ～、え～？ かんべんしてくれよ～」

第一章のあとがき

旧題「火の精霊」の背景を描くにあたり、足場をしっかりさせておきたくてあちこち放浪しました。本作の背景。これが大前提。（大好きな）オカルト的分野、（大好きな）スピリチュアル分野、（ちょっと苦手な）学術的な分野、などなど、古代と名のつくものは手当たりしだいに……時間が許す限り……見て回りました。

日本の黒曜石の原産地と原産地に関わる遺跡、地元に残る神話や伝説からスタートして、地球史、人類史、石器と文化、太古からの大陸。スコット=エリオット、チャーチワード、ゴドウィン。メタトロン、サナンダなどの古代文明に関するチャネリングの数々、神智学的見地、人智学的見地。日本に戻って古事記、日本書紀、日月神示、ホツマツタエ。等。

精神安定剤代わりにシュタイナーの人智学関連の書籍に長いこと親しんできたミネムラの心を最も強くつかんだのは……意外にも……ホツマツタエでした。

正直なところ、最初は抵抗がありました。HPや書籍を調べ出してみたものの、どうにも肝心の内容に入っていけない。似ている訳もあれば全然違う意味の訳もある。それなら自分にも訳せるのか……？ そう思いついて、やってみることにしました。いくつかのHPを行ったり来たりしながら。見慣れない言葉を調べながらというのはなかなかしんどい。それでもこれは面白いかも、と思ったのはシラヒトコクミ事件のあたりからですかね、まあ、こんな時代にそんなことが！？ というえぐい事件で、原因を作ったのがイサナギの兄弟だったりする。

それはさておき。

ホツマツタエと神秘学の間には驚くほど共通点があります。それはたとえばホツマのココとアカシャー年代記のココとが、それからアレもコレも、とあげることもできますが、ミネムラ自身、そういうのを読むのが苦手なので、共通点が多々ある、としておきたいと思います。ホツマツタエとは、壮大な壮大な、壮大な比喩。そして、もしかしたら真実。そう感じて本作の背景の根拠としています。

ホツマでも、たしか日月神示でも、日本列島では肉食は推奨されていなかった。やむなく肉食する時は必ず野菜をいっしょに摂るように神的存在は指導していた。だから、一万年間とも二万年間ともいえる黒曜石の採取加工の歴史の発端に何があったのか。ただ獣を獲るだけだったのか。原産地が限られているというはあるけれども、人が口伝で集まってきたわけではなくて、よんどころのない事情があつて組織的に行われたんじゃないかなと。そんなところから第一章「世界の果ての島」が始まったのです。

2021年10月9日 記

参考文献

日本列島の誕生：平 朝彦(著) 岩波新書

黒曜石3万年の旅：堤 隆(著) NHK BOOKS

石器時代の大規模な「武器工場」：

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/041500051/>

ホツマツタエ解説ガイド：<https://gejirin.com/>

神智学大要・太陽系：A・E. パウエル(著)，仲里 誠桔(翻訳) たま出版

アカチャー年代記より：R・シュタイナー(著)，高橋 巖(翻訳) 国書刊行会

地球年代記：R・シュタイナー(著)，西川 隆範(翻訳) 風濤社

音楽の本質と人間の音体験：R・シュタイナー(著)，西川 隆範(翻訳) イザラ書房

動物の本質：カール・ケーニッヒ(著)，塚田 幸三(翻訳) ホメオパシー出版

奥付

Salamander in the circle

第一章 世界の果ての島

2021年 9月9日 初版発行

2021年10月9日 第二版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
